

〔論 説〕

ハンガリーにおける 新支配エリートの台頭

——労働者党の変質過程 1956年—1988年

森 彰 夫

序

第1章 国家党とその変質

第1節 国家権力と国家党の関係

第2節 カーダール主義

第2章 国家権力とその保持者

第1節 知識人階級か？

第2節 「階級性を持った身分」

第3章 新支配エリートの登場

第1節 反対派エリートの誕生

第2節 複数政党制への移行

第3節 国家と党の分離

結 び

序

1989年からの東欧諸国やソ連の民主化は、唐突な政変という印象を与えていた。しかし実際には、1956年のスターリン批判以来の脈々と続いてきた上からの民主化の試みが結実したものとして位置づけられる。

ハンガリーでは、1956年の挫折以降、スターリン主義的社会主義の分

〔論 説〕

析が始まり、1968年に新経済メカニズムが導入され、1970年代にルカーチ⁽¹⁾の弟子たちによる体制批判が行われた。1980年代からは元ハンガリー社会主義労働者党（以下、労働者党）員らが形成した民主反対派、労働者党内に台頭した改革派、人民作家グループや新世代のテクノクラートが重要なポストを押し、スターリン主義的社会主義を上から民主化し市場経済を導入するまで権力は変質してきていたのである。

この時期のハンガリーについては、すでにいくつかの先行研究がなされている。ビハリ・ミハーイ⁽²⁾は『自由への民主的な道』⁽³⁾で、歪められた社会主義のなかで国家党と官僚制国家機関が同時に崩壊したと分析している。ビハリが編集した『ハンガリーにおける複数政党制の形成 1985年—1991年』⁽⁴⁾では、1985年以降の動向がまとめられている。『ハンガリー政治年鑑』⁽⁵⁾には、各分野の専門家の論評がのせられていて大変参考になる。支配階級の分析としては、知識人階級が登場し権力を握ったとするコンラード・ジェルジ⁽⁶⁾とセレーニ・イヴァーン⁽⁷⁾の『知識人の階級権力への道』⁽⁸⁾（邦訳『知識人と権力——社会主義における新たな階級の台頭』）があげられる。日本人では盛田常夫『ハンガリー改革史』（日本評論社、1990年）が、戦後ハンガリーの改革の総括を試みるなかで、一党支配の空洞化やシステムの崩壊としてとらえている。南塚信吾『ハンガリーの改革——民族的伝統と「第三の道」』（彩流社、1990年）は、スターリン型社会主義の超克とともに社会主義と資本主義を総合した第三の道の模索が追求されると分析している。

本稿では、1956年以降、国家権力がいかにして維持され、労働者党がどのように組織され、どのような特質をもっていたか、国家権力の保持者はどのようなカテゴリーの人々なのか、また1989年までに国家党と国家権力が崩壊したと見るのではなく、新支配エリートが台頭し労働者党自ら

が変質していく過程を明らかにし、1989年以降の転換を理解する手だてとした。

- (1) ルカーチ・ジェルジ Lukács György (1885-1971) 今世紀最大のマルクス主義文学批評家・哲学者の一人。ドイツでジンメルとウェーバーのもとで学び、『魂と形式』、『小説の理論』を書いた。第一次世界大戦後の1918年12月に結成されたばかりのハンガリー共産党に入党。ハンガリー・ソヴィエト共和国では教育人民委員代理を務めた。革命の敗北後、ウィーンに亡命。ハンガリー革命の総括として書いた『歴史と階級意識』は、ジノヴィエフらによって批判された。1928年にプロレタリア独裁ではなく労働者と農民の民主主義的独裁を提起した「ブルム・テーゼ」は、再び批判された。1931年から1933年のヒトラーの権力掌握までベルリンに滞在した後、モスクワに亡命し『若きヘーゲル』を書いた。第二次世界大戦後、ハンガリーに帰国。1956年のナジ・イムレ政府の文相となる。ソ連軍の介入でナジらとともにユーゴスラヴィア大使館に避難するが、ルーマニアに連行され、1957年3月まで拘留された。1960年代には「マルクス主義のルネサンス」を唱えるとともに、スターリン主義批判を展開した。
- (2) ビハリ・ミハイ Bihari Mihály (1943-) エトヴェシュ・ローランド大学国家および法学部長。1988年4月に労働者党から除名された。
- (3) Bihari Mihály, *Demokratikus út a szabadsághoz*, (Budapest, 1990)
- (4) Bihari Mihály (ed.), *A többpártrendszer kialakulása Magyarországon 1985-1991*. (Budapest, 1992)
- (5) Kurtán Sándor, Sándor Péter, Vass László (ed.), *Magyarország politikai évkönyve 1988*. (Budapest, 1989), *Magyarország politikai évkönyve 1990*. (Budapest, 1990)
- (6) コンラード・ジェルジ Konrád György (1933-) 1960年代にブダペストの都市計画研究所研究員。セレーニとともに書いた *Az értelmiség útja az osztályhatalomhoz* 邦訳『知識人と権力——社会主義における新たな階級の台頭』船橋晴俊・宮原浩二郎・田仲康博共訳 (新曜社, 1986年)のためにセレーニとともに当局に逮捕された。1990年から国際ペン・クラブ会長。
- (7) セレーニ・イヴァーン Szelényi Iván (1938-) 1975年までハンガリー中央統計局とハンガリー科学アカデミー社会学研究所研究員。1975

〔論 説〕

年にイギリスへ亡命。一時ケント大学で教えた後、1980年までオーストラリアのフリンダース大学で教え、現在は米国ウィスコンシン大学の社会学部教授。

- (8) Konrád György, Szelényi Iván, *Az értelmiség útja az osztályhatalomhoz*, (Budapest, 1985)

第1章 国家党とその変質

第1節 国家権力と国家党の関係

1956年10月のハンガリーにおけるスターリン主義国家体制の崩壊は、同時に労働者党の前身で、1948年にハンガリー共産党と社会民主党との合同で誕生し、一党独裁を行ってきたハンガリー勤労者党（以下、勤労者党）の崩壊でもあった。85万人もの党員を擁し、巨大な党機関員軍団や全国に網の目のようにはりめぐらされた組織をもっている党が、なんの抵抗もできなかったのである。党は国家体制を支えるもつとも頼りになるもののはずであったが、まったく逆に国家体制が党を支えていたということが白日の下にさらされた。国家権力が作った党あるいは国家権力の道具になっているような党は国家党である。勤労者党のようなタイプの国家党には、複数政党制においても、続々と結成された労働者評議会（ソヴィエト）による真の労働者自主管理においても居場所はなかった。すなわち国家党は、一党独裁下の党国家においてのみ存在できるのである。

しかしソ連の軍事介入によって国家権力はかろうじて再建されたのである。ソ連軍とともに権力を握ったカーダール・ヤーノシュ⁽¹⁾らのグループは、「革命労農政府」を樹立したが、完全に孤立していたため、政府の背後に再び国家党を組織することから始めた。こうして誕生したのがハンガリー社会主義労働者党である。1956年11月には3万人、12月に10万人、1957年12月には40万人の党員を数え、1年間で勤労者党の党員数の半

ハンガリー共産党—勤労者党—労働者党 党員数の推移(1945-1970)

| 時 期 | 党員数 全国 | ブダペスト |
|-------------|-----------|----------|
| 1945. 7. 初旬 | 226,577 | 33,625 |
| 10. | 508,801 | 85,763 |
| 1946. 1. | 608,728 | 131,000 |
| 1947. 1. | 670,818 | 178,488 |
| 選挙期間 | 743,836 | 211,851 |
| 1948. 二党合同期 | 1,128,130 | 約417,000 |
| 12. | 1,120,533 | 414,132 |
| 1950. 1. | 828,695 | 332,787 |
| 1951. 1. | 862,114 | 332,470 |
| 1952. 1. | 945,606 | 337,381 |
| 6. | 953,254 | - |
| 1953. 1. | 906,087 | 329,964 |
| 7. | 885,197 | 329,985 |
| 1954. 1. | 862,603 | 303,898 |
| 1955. 1. | 853,541 | 292,763 |
| 1956. 1. | 859,037 | 293,724 |
| 12.30. | 101,806 | 21,019 |
| 1957. 1.26. | 151,000 | 35,113 |
| 2.下旬 | 190,000 | - |
| 4. 1. | 227,420 | 59,210 |
| 5. 1. | 283,390 | 76,498 |
| 6. 1. | 345,733 | 98,196 |
| 7. 1. | - | 112,200 |
| 11. 1. | 389,378 | - |
| 12. 1. | 394,910 | 118,758 |
| 1958. 4. 1. | 403,118 | - |
| 1959. 1. 1. | 416,646 | - |
| 1959. 9. 1. | 437,965 | 130,355 |
| 1962. 9. 1. | 511,965 | 149,723 |
| 1966. 6.30. | 584,939 | 167,204 |
| 1967.12.31. | 601,917 | - |
| 1970. 6.30. | 662,397 | 188,867 |

(党史研究所資料 276.f.1/19-9.32.)

〔論 説〕

分にもなった⁽²⁾。政治学者のシュレット・イシュトヴァーン⁽³⁾によれば、「独裁の新版を党の力，“コミュニスト”の意志が作ったのではなく、再び逆に、国家権力が党を組織し、権力の力が増大すると平行して数が増える“コミュニスト”を生み出した」⁽⁴⁾のである。このように独裁主義的な国家社会主義体制にとって国家党はなくてはならないものであった。

労働者党は、市民社会のあるグループの意志を政治の舞台で表明する政治的共同体や、同一の利害や価値観をもった人々の政治運動ではなく、決められた国家目標を達成するために大衆を動員したり、様々な組織や機構をコントロールするための国家の道具で、国家機構の一部であるという性格が強い。このためシュレットは「社会学的・政治学的にはこの組織は政党ではなかった」⁽⁵⁾と断言している。

党員は、自主的であったり、自律的な大衆に基盤があるのではなく、党員であることからの利益を享受するために、党幹部に仕える従者や子分のような人々からなっていた。民主集中制と呼ばれる組織原則は、上部機関に対する絶対的な服従を要求する党規律、組織間における水平的な関係をもつことの禁止、機構内における厳格なヒエラルキーを意味し、独立したプラットフォームやフラクシヨンの存在だけではなく、独立した意見を表明することや保持することを不可能にした。またナジ・イムレ⁽⁶⁾支持者やラーコシ⁽⁷⁾支持者に対する“二正面闘争”によって、労働者党には実質的に諸立場を放棄した者だけがとどまれた。このため党内は非政治的、非イデオロギー的であった。労働者党は、典型的な国家党としてスタートしたのである。

(1) カーダール・ヤーノシュ Kádár János (1912-1989) 精密機械工として 17 歳から労働運動で活動。1931 年から共産党員。1948 年 8 月から 1950

年6月まで内相。1951年春、でっち上げられた罪で逮捕され、1954年に名誉回復。1956年7月、中央委員会書記、政治局員。1956年11月、ソ連軍介入後、首相および労働者党第一書記となる。1958年1月、自らの要望で首相を辞すが、1961年から1965年まで再度首相。1988年5月の党全国集会で失脚。

- (2) Szenes Iván, *A kommunista párt újjászervezése Magyarországon 1956-1957* (『ハンガリーにおける共産党の再建 1956年—1957年』) (Budapest, 1981), pp. 191-193.
- (3) シュレット・イシュトヴァーン Schlett István (1939-) エトヴェシュ・ローランド大学講師
- (4) Schlett István, “Egy ál(lam)párt tündöklése és bukása (Vázlat az MSZMP történetéről)” (「ある疑似〔国家〕政党の輝きと破綻〔労働者党史概説』」), *Századvég* (『世紀末』) 3-4 (Budapest, 1990), p. 51.
- (5) *ibid.*
- (6) ナジ・イムレ Nagy Imre (1896-1958) 第一次世界大戦でロシアの捕虜となり、ロシア共産党(ポリシェビキ)に入党。第二次世界大戦後、帰国し、1953年7月に首相となり農業問題に尽力したが、1955年3月に「右翼的偏向」を理由に解任され、党からも除名された。しかし1956年には民衆に支持され、10月14日に復党し、民衆蜂起の後、27日に再び首相となる。ソ連軍の介入でユーゴスラヴィア大使館に避難したが、ルーマニアに連行され、1958年6月16日に処刑された。
- (7) ラーコン・マーチャーシュ Rákosi Mátyás (1892-1971) 第一次世界大戦でロシアの捕虜となった後、帰国してハンガリー共産党の結成に加わり、革命政府の商務副人民委員などを務める。第二次世界大戦後はハンガリー共産党総書記および首相としてスターリン路線を遂行。1956年の民衆蜂起でソ連へ亡命。

第2節 カーダール主義

ハンガリーの人々は抵抗することに希望を見いだせず、再び妥協せざるをえなかった。権力にとっても、国家党を大衆政党に再組織することは必要であった。カーダールが打ち出した“我々に敵対しない者は我々の味方

〔論 説〕

である”というスローガンは、体制内では転換を意味した。1950年代末から1961年春までに行われた農民の生産協同組合への組織化が終了すると、“我々に敵対しない者は我々の味方である”というやり方は成熟し、強制や大衆動員という手段をやめ、政治的・イデオロギー的なキャンペーンも謙虚にするようになった。非合理的な独裁の代わりに合理的な計算が行われ、組織的・形式的な支配のテクニックを採用し、信頼や安心を呼び起こし、強制ではなく協調による統合がはかられた。また、“グヤーシュ・コミュニズム”と呼ばれるように物質的な福祉を保障することによって、イデオロギー上の正当性を補うことに努めた。

こうして党内の関係は安定した。党機関員の頻繁な交代がなくなり、党員にとっても正常な市民生活を築くことが可能となった。それまで冷酷に自己犠牲が要求されていたのに対し、合意が尊重されるようになった。党機構も新しいスタイルで新しい課題にたずさわるなかで、一般の役所に似たものになっていった。党員は、行政や経済の専門家のパートナーになっていかなければならなかった。次第に党員のキャリアは、知識人であるためのキャリアになっていった。このため大卒の党機関員が増え、党機構で働くことを将来のステップにするための糧と考える風潮も生まれた。

カーダールは、“二正面闘争”を徐々に中道政策にトーンダウンさせていった。このため1957年以降、“右派”と“左派”といった色分けが感じられるようになり、それは1966年の経済改革に関する党中央委員会決定以後、ますます鮮明になっていった。独立したプラットフォームやフラクションは、この時期にはまだ形成されなかったが、改革派と保守派がいることは感じられた。カーダールは、これらを消滅させるのではなく、両派をうまく操り支配したのである。両派の立場の違いが明白になることによって、社会に判断材料が示され、希望を抱かせるという党のあり方は、他

の国家党には見られないものであった。

カーダール主義の特徴でより重要なのは、党の指導的役割の内容とその手段の修正にある。行政組織、企業やその他の社会組織に部分的な独立性を与え、新しい統合のテクニックを試みたのである。直接指令を下すのではなく、調整者となるという試みであった。これによって縦の関係とともに、部署や地域ごとに横の関係ができた。これは党機構にも当てはめられた。この試みは、行政組織、企業やその他の社会組織の党へのヒエラルキー的な依存を弱めるとともに、党内でのヒエラルキー的な依存関係を弱める結果を招いた。

シュレットは、「機構におけるブルーリズムが実現した」⁽¹⁾と指摘している。各機構は、地域や部署の利害を中央に対して有効に反映させるようになった。党機構はこの利害の絡まりのなかに溶け込み、指導やコントロールすることのほかに、その利害を代弁するようになった。党中央委員会が指名した県の第一書記を、その土地の党機構が反対し、ボイコットして“よそ者”を土地の者に代えるということも起こった⁽²⁾。中央の機構にも地域や部署の代表が進出し、中央の路線の変更をも達成するようになっていった。経済改革にブレーキをかけるために、“大企業ロビー”が大きな役割を果たすようになっていったのはそのよい例である⁽³⁾。

1968年の新経済メカニズムの導入によって、国家と社会の関係に変化が起こった。第二経済や第二社会において、人々はヒエラルキー的な依存から解放されたのである。国家権力は、この時点までに1956年事件直後に比べ、大きく変身していたのである。

(1) Schlett, *op. cit.* p. 54.

(2) *ibid.*

〔論 説〕

(3) *ibid.*

第2章 国家権力とその保持者

第1節 知識人階級か？

国家社会主義体制においては誰が権力保持者であるのか。古典的マルクス主義においては、歴史は階級闘争の歴史以外ではありえなかった。これに対しマックス・ウェーバーは、階級概念を市場経済の権力構造の叙述においてのみ用い、市場経済でない場合には、共通の生活様式や価値体系に基づく共同体である身分の Kategorie を使用する。これは資本主義以前のアジア的社会の所有権の様式が、国家への服従と引き換えに官吏たちに授けられる世襲や売却のできない私有地で、領主が社会的権威や大きな剰余生産物の分け前にありつけたのが、資産の所有者としての資格ではなく、官吏としての資格においてであったことなどが指摘できるからである。ウェーバーによれば、権力の地位は一般的に一人もしくは複数の人が、なんらかの共同体活動において他の参加者の反対に対しても自分の願望を実現できることであり、“経済に起因する権力”は一般に権力と同一ではない。

トロツキーは支配カーストについて語り、それを党と国家の官僚制として理解していた。ミロバン・ジラスはそれを新しい階級として定義づけた。ポスト・スターリン時代のハンガリーの社会学者であるコンラードとセレーニは、スターリン時代には官僚層の独占的な権力を、ポスト・スターリン時代にはスターリン時代の伝統を保持する官僚層とテクノクラシーとの妥協的同盟を指摘した。彼らは両グループの構成員が共に知識人で、包括的な階級支配の構築を目指し、資本主義社会での剰余生産物の所有を資本所有が正当化するように、国家社会主義では再分配者すなわち知識人がもっている知識によって再分配が正当化されるとして、知識人階級を定義づ

けた⁽¹⁾。

国家社会主義体制において支配階級は存在しているのか、存在しているとすれば誰が支配者なのか、このように様々な定義がなされている。ハンガリーのポスト・スターリン時代、カーダール政権期の経済は、古典的な社会主義計画経済としてとらえることはできない。需要と供給およびそれに基づいた価格メカニズムといった自律的な市場がか細くではあっても存在し、1968年の新経済メカニズムの導入や第二経済の承認などの経済改革によって、経済活動をする人々をますます市場要素が規定するようになっていったからである。このためカーダール政権期の権力関係を、市場経済でない社会主義では階級カテゴリーは適用できないというウェーバーの概念では説明できない。

またスターリン時代、ポスト・スターリン時代を通して、権力にある人々の地位は専門的な知識が保障していたのではなく、労働者党やそのイデオロギーに対する忠誠や血縁・地縁といったものが保障していた。経済学者のパウエル・タマーシュ⁽²⁾は、「計画指令メカニズムは、それまでの“職業革命家”，工員，“計画官僚”や新旧の“工場長”（そのなかには労働者工場長）からなっているような経済指導エリートを出現させた」⁽³⁾とし、彼らが経済指導に必要な専門知識を欠き不適格であったことを述べている。

ポスト・スターリン時代には、支配者の枠が広がり、専門的な知識を持ったテクノクラートが徐々に不適格の人々にとって代っていったが、コンラドやセレーニが言うように十把一からげに知識人階級が権力を握っていたというのは無理がある。また知識人というのは一般的すぎるので、具体的な職能を表すカテゴリーで示すべきである。このためトロツキーやジラスの概念をポスト・スターリン時代に発展させたもの、すなわち党と国家の官僚制および大企業のマネージャー層が権力の保持者と言えよう。大

〔論 説〕

党員の職業分布

| 職 種 | 労働者党 | 勤労者党 |
|-------------|-----------|-----------|
| | 1957.4.1. | 1956.1.1. |
| 労働者 | 29.8% | 36.2% |
| このうち工場労働者 | 24.2% | 30.3% |
| 農民 | 11.5% | 11.0% |
| このうち生産協同組合員 | 7.8% | 7.6% |
| 知識人 | 6.2% | 5.8% |
| このうち技術系 | 1.9% | 1.8% |
| 事務員+軍人・警官 | 44.1% | 38.0% |
| 学生 | 0.4% | 0.5% |
| 小工業生産協同組合 | 1.0% | 1.6% |
| 独立製造業者、商人 | 0.6% | 0.8% |
| 無職 | 6.4% | 6.1% |

(党史研究所資料 288.f.PTO 1957-60, p. 825.)

企業のマネージャー層の権力は、1960年代の大規模な企業合同や1968年の経済改革の成果として、マネージャー層の決定権を増大させる形で形成された。このグループが再分配に関する決定を下し、その願望を社会の他の部分に対して実現している。このグループのなかでも、党中央委員会のメンバーと彼らに直接仕える党官僚が、彼らの手中に権力を集中させている。党中央委員会は、党や国家の官僚や大企業のマネージャー層の利害を調整する場となっていて、カドルの継続的な配置換えや交代が行われている。

(1) Konrád-Szelényi, *op. cit.*

(2) バウエル・タマーシュ Bauer Tamás (1946-) 1966年、20歳で労働者党员となった。1968年以来、ハンガリー科学アカデミー経済学研究所研究員。1970年代の初め頃からサミズダートの *Beszélő* (『話している』) グループに加わった。1974年、党から除名された。1985年の複数候

補者選挙に立候補しようとするが、妨害にあつて果たせなかった。ボジュガイの誘いを受け、1985年から1988年まで愛国人民戦線全国評議会のメンバーとなった。科学勤労者民主労働組合や自由民主同盟の創設メンバー。1988年から5年契約でフランクフルト大学で社会主義経済体制について教鞭をとっている。

- (3) Bauer Tamás, "A második gazdasági reform és a tulajdonviszonyok."
（「第二次経済改革と所有関係」）、*Mozgó Világ*（『動く世界』）11.（Budapest, 1982）

第2節 「階級性を持った身分」

それではこのグループは階級なのか、それとも身分なのか。権力についている者たちの間では、個人的な関係の洗練されたネットワークが形成され、彼らの生活様式や価値体系はお互いに似たものになっている。彼らの共通のエトスのなかで最も本質的なものとして特権意識が形成される。経済学者のサライ・エルジェーベト⁽¹⁾は、カーダール時代の権力保持者を「階級性を持った身分」⁽²⁾と定義している。彼女によれば、身分というのはグループ内の人間関係の特徴やその権力が基本的に経済的ではない性格があるため、階級性があるというのはその権力が低水準ではあっても市場においても勢力を伸ばし経済的権力にもなりつつあるからであるという。

カーダール時代後半には民主反対派、党内改革派や新世代のテクノクラートが進出し、1989年の政権交代後も人民作家を中心とする中道右派・保守勢力が旧支配勢力とヘゲモニー闘争および妥協を繰り返し、権力は変質してきている。グラムシが言うように政治的・経済的権力を獲得するだけではヘゲモニーを確立したことにはならず、社会的・文化的にも旧支配勢力の価値体系・イデオロギーを打破して初めてヘゲモニーを確立したことになる。このように支配勢力の政治・経済面だけでなく、共通の価値

〔論 説〕

体系・イデオロギーや生活様式といった支配勢力の身分としての側面も無視できない。

現在、国有企業の民営化が行われつつあるが、所有・生産関係から支配権力を分析することはやはり必要である。生産関係上の利害・地位・性質などを同じくする人間集団が、階級を形成する重要な要素である。ハンガリーでは1950年以降、資本家や大土地所有者の企業や農地を労働者や農民の所有にするためとして国有化・生産協同組合化した。これによって資本家や地主階級は消滅し、階級のない社会実現の第一歩が記されたはずであった。しかし実際にはパウエルが言うように、計画指令システムがそれまでの職業革命家、工員、計画官僚や新旧の工場長らによる経済指導エリートを生み出し、一般の労働者や農民は彼らに従属するようになった。

1968年の新経済メカニズム導入以後は、直接的ではなく間接的な経済手段によってコントロールするようになり、単なる国家による所有ではなく党国家による所有の性格を強めた。中央の党や国家の官僚制ヒエラルキーのもと、企業の幹部たちも、企業資産の運用に関する戦略的決定においてその願望を表現することができるという範囲で所有者である。大企業の幹部たちは、中央のヒエラルキーの政策に直接、決定的な影響力を行使することによって彼らの所有権を最大限保障しようとする。これに対して中小企業の幹部たちは、むしろ中央のヒエラルキーからできるかぎり距離を確保することによって所有権を増大させることができる。一般に資本主義における所有権に比べ、国家社会主義における企業幹部の所有権の範囲は狭いように思われるが、大企業幹部の場合は経済政策や剰余価値の再分配に大きな影響力をもっている点で、所有権の範囲を広くしている。

ウェーバーのように市場経済の権力構造を叙述する場合に限定せず、生産手段を誰が所有しているかによって階級関係を規定する伝統的な方法論

は、東欧諸国やソ連を分析する際には有効であると思われる。この方法論に従えば、党と国家の官僚制および大企業のマネージャー層が実質的な有産階級を構成し、労働者と農民が無産階級である。しかし名目的には国有や協同組合所有は社会的所有であり、労働者や協同組合員の所有である。法的にも党と国家の官僚制および大企業のマネージャー層に所有権が与えられているわけではない。このため結果的にはサライの定義である「階級性を持った身分」と同じ定義を与えることができるのではないだろうか。もちろん、コンラードとセレーニが指摘しているように「所有は単に支配正当化の一つの可能な形態にすぎず」⁽³⁾、権威関係や支配の問題なども検討する必要がある。

この「階級性を持った身分」の正当性は、実質的にも労働者や協同組合員の利害を代表している場合のみ承認される。現実には正当性は低水準で推移し、1956年、1968年や1980年のように大衆の不満が爆発してきたのである。東欧諸国のなかで唯一、ポーランドで独立労組「連帯」が組織され、弾圧をくぐり抜け、真に正当性を持った労働者や農民の権力が確立される可能性があった。しかし「連帯」創設者の一人であるアダム・ミフニクは、「なぜ私はワレサに投票しないか」という声明のなかで、ワレサが権威主義的な権力者になる危険性を指摘している⁽⁴⁾。また「連帯」指導者の一人であるグビアズダらは、「連帯」は労働者・農民の利害を守るといふ労働組合本来の姿に戻るべきであると、労働者や農民の生活を侵害している「連帯」政府の政策に反対してストライキをうっている。このように「連帯」権力の変質も指摘できよう。

真の正当性を持つ可能性があった「連帯」のような運動や組織は、ハンガリーでは1956年に労働者評議会が体現していたが、1956年12月に労働者評議会が弾圧されて以来、なぜ再びできなかつたのであろうか。ハン

〔論 説〕

ガリーでは1956年事件以後、分裂した社会を統合するため“敵対しない者は我々の味方である”というカーダールのスローガンのもと、権力は社会構成員の私的な生活には干渉しなくなった。このため人々は、第二次世界大戦で中断していたプチブルジョア化のプロセスを広範に展開することができ、第二社会を構築した。またカーダール政権は消費物資の供給に努め、ポーランドのような物不足に至らせないようにすると同時に、サービス産業や小工業において私的経営を認めるなどの経済改革を行ったので、広く第二経済が形成された。社会学者で独立労組民主リーグ（以下、リーグ）の顧問でもあるブルスト・ラースロー⁽⁶⁾によれば、「ハンガリー人は第二経済や第二社会があったためバラバラで、ポーランドのように均一にプロレタリア化しなかった」⁽⁶⁾ので、「連帯」のような運動が発展しなかったと分析している。

カーダール時代の「階級性を持った身分」の正当性は、したがって、第二経済と第二社会の存在とその影響力が増大化するのを容認することによって与えられていた。また党と国家の官僚制がソ連党指導部の支持を得ていることと、カーダールの黄金期には、大企業マネージャー層がソ連市場で無制限に製品供給をすることと原料が提供されていることによって、そしてカーダールの没落期には、西側諸国からの際限のない借款によって保障されていた。「階級性を持った身分」の内部では、各人の正当性を各人が相互に利害を調整し妥協することによって相互に認め合っている。ハンガリーなどでは各人の正当性の承認が「主に廊下で行われる」⁽⁷⁾ので“廊下での正当性”と言える。

カーダール時代は「階級性を持った身分」に敵対する者は、もちろん、弾圧され社会から追放された。1956年に積極的に参加した人々は投獄されたか国外に亡命してしまったため、カーダール政権の第二経済や第二社

会の容認というような懐柔策の前に、国内にはあえて敵対しようという人は皆無に近かった。しかし1970年代になって、「階級性を持った身分」によって決められたルールに従うことを拒否する知識人グループが登場し、この均衡は破られた。「階級性を持った身分」の変質が始まったのである。

- (1) サライ・エルジェーベト Szalai Erzsébet (1948-) ハンガリー科学アカデミー経済学研究所研究員。
- (2) Szalai Erzsébet, “A hatalom metamorfózisa?” (「権力の変質?」), *Valóság* (『真実』) 6. (Budapest, 1991) p. 5.
- (3) Konrád-Szelényi, *op. cit.* p. 41.
- (4) Adam Michnik, “Miért nem szavazok Walesára?”, 『話している』 1990. 11. 24. (Budapest) p. 19.
- (5) ブルスト・ラースロー Bruszt László (1953-) ハンガリー科学アカデミー社会学研究所研究員。独立労組民主リーグの顧問。与野党円卓会議にリーグの代表として出席。
- (6) 1991年8月15日、筆者に対するブルストの談話。
- (7) Szalai., *op. cit.* p. 3.

第3章 新支配エリートの登場

第1節 反対派エリートの誕生

1968年は、西ヨーロッパのネオマルクス主義や学生運動、プラハの春などが、大きな政治的・精神的影響をもたらした年である。ハンガリーでは、1968年から新経済メカニズムによって経済改革が始められたが、政治改革は切り離されタブー視されていた。プラハの春がワルシャワ条約機構軍によって弾圧されたことは、政治的には決定的であった。ハンガリーの支配エリートのなかからこれに抗議するグループが現れ、後の政治改革や“体制変革”を担う勢力が形成され、労働者党が変質していく発端となった。1956年以降のハンガリーにおける転換点といえ、この章では新支

〔論 説〕

配エリートがいかに台頭し労働者党が変質していったかを政治史的に考察する。

プラハにワルシャワ条約機構軍が介入した時、ユーゴスラヴィアのコルチュラ島での国際夏期大学に参加していたハンガリーの哲学者と社会学者のグループは、ワルシャワ条約機構軍の侵略に対する抗議に署名した。これによって党指導部と哲学者・社会学者グループとの亀裂が明らかになった。党中央委員会は11月18日、哲学研究所と社会学研究所について「党の政策から逸脱し、精神的に誤った政治的には有害な右翼的な主張が現れた」⁽¹⁾という声明を出し、コルチュラ島で署名した党員を党から除名した。また社会学研究所の多くの研究者がチェコスロヴァキアでの弾圧に反対したので、社会学研究所長のヘグドゥーシュ・アンドラーシュ⁽²⁾を解任した。イデオロギー誌や日刊紙で彼らに対する批判キャンペーンがはられた。抗議に署名した哲学者たちはブダペスト学派として知られるルカーチ主義者たちで、ルカーチ自らが党に対してかれらを擁護したので、この時点では処罰を免れた。

1960年代のルカーチによるスターリン主義批判や「マルクス主義のルネサンス」の提唱⁽³⁾によって、スターリン主義的社会主義に対するオルタナティブが示され、マルクス主義にいわばプルーリズムが存在していた。ルカーチの存在は、国家党としての労働者党が無批判でいられることを不可能にしていた。しかしルカーチは1971年に死去する。1972年の秋には「イデオロギーにプルーリズムはなく、マルクス主義が唯一、実践活動に導き、知識人勢力を組織しまとめる思想である」とし、ルカーチ主義者たちに対する攻撃が始まった。1972年11月14-15日の党中央委員会は、「社会主義に対して敵対的で我が人民の利益を脅かす主張や著作が公表されないようにするという原則を貫かねばならない」と決定した。

1973年初めの党中央委員会は名前を上げ、ルカーチ主義哲学者のキシユ・ヤーノシュ⁽⁴⁾、ベンツェ・ジェルジ⁽⁵⁾、ヘッレル・アグネシュ⁽⁶⁾、マルクシュ・ジェルジ⁽⁷⁾、マルクシュ・マリア⁽⁸⁾、ヴァイダ・ミハイ⁽⁹⁾、そして社会学者のヘゲドゥーシュを政治的犯罪者として批判した。「労働者階級の階級としての存在、国際労働者運動の革命的役割や歴史的な重要性を否定し、社会主義国の社会主義性やその成果を疑っている」という激しい批判によって、彼らは研究者としての公職から追放された。これによって労働者党は、はからずも自らマルクス主義反対派の存在を認めることとなった。

哲学研究所の再編が始まり、三つの重要な研究分野である哲学史、論理学、宗教批評を研究所から取り上げ、研究者も他の職場に配置換えしてしまった。党のアジテーションおよびプロパガンダ委員会が、哲学研究所と哲学雑誌を直接監視下に置いた。この委員会は恒常的に顧問として哲学研究者グループに、ソヴィエト文化の発展、経済問題へのコメント、生産協同組合農民の生活スタイルを形成する諸要素といったテーマを与え、『ハンガリー哲学評論』誌は、このテーマに沿って論文を載せるというグロテスクな状況が生み出された。マルクス主義内の刷新しようとする試みが摘み取られたため、哲学の独創性が排除され、ステレオタイプの公式見解ばかりとなった。1970年代の民衆の特徴である政治的無関心やマルクス主義からの離反は、これに負うところが少なくない。

経済の分野においても、1972年は反改革への転換の年であった。経済統制から50の大企業だけを優遇するという逆戻りの政策がとられ、新経済メカニズムの生みの親であるニエルシュ・レジエ⁽¹⁰⁾は、1974年に中央委員会書記を、1975年に政治局員を解任され、経済学研究所所長に左遷された。

〔論 説〕

このためハンガリーで反体制派が活動を開始するのは、1977-1979年ごろであった。チェコスロヴァキアで反体制派が憲章77を結成したこと、さらにその指導者たちに対して始められた裁判から刺激を受け、これまで潜んでいた反体制勢力が結集することとなった。ドナート・フェレンツ⁽¹¹⁾らの1956年の活動家、キシュラの反体制知識人、チョオーリ・シャーンドル⁽¹²⁾らの人民作家、ラドゥノーティ・シャーンドル⁽¹³⁾らの独立した知識人ら34人が、裁判にかけられている憲章77の指導者に連帯を表明した。カーダールは署名者を「34人のギャング」と攻撃したが、さらにプラハ裁判の判決に抗議して256人が名を連ねた。権力によってこれらの人々の多くが職を奪われ、著書の出版は禁止された。

しかし「飛ぶ大学」が家から家へ移動しながら機能し、批評家であるケネディ・ヤーノシュ⁽¹⁴⁾の編集で、「我々のプロフィールに属さない」と判を押され送り返された著作が集められ、「プロフィール」と題しタイプライターとカーボン紙で作成された。また社会学者のショルト・オットーリア⁽¹⁵⁾は貧しい人々の援助基金SZETAを作り、社会活動家のシラージ・シャーンドル⁽¹⁶⁾は追放された失業者の仲介友好組織MUKIを組織した。

1981年12月のポーランドの「連帯」の弾圧と同時に、ハンガリーでも保守派が巻き返し、党内改革派のポジュガイ・イムレ⁽¹⁷⁾は文相から愛国人民戦線の第一書記に左遷された。キシュラの反体制知識人は、「連帯」が弾圧されたのを機に民主反対派としてのアイデンティティを確立し、サミズダートの『話している』を発行するなかで戦略を練りあげた。彼らの戦略は、現体制の外から権力に圧力をかけ、硬直化した体制をほぐすような政治的・経済的改革を仕向けさせるというものであった。また民主反対派は、知識人グループを越えた社会的な繋がりが弱かったため、その主体は知識人に限定されていた⁽¹⁸⁾。

一方で、1980年代前半には、初めて当局の検閲を受けない『動く世界』というリベラルな公認雑誌が発行された。Teaház（喫茶室）という名前の独自のサロンが、隔週の土曜日にブダペシュトのアパートで催され、主に文化的な企画や討論がなされた。もっとも当局の許容の範囲内でのことで、『動く世界』も間もなく発行禁止となり、Teaházも AB Hírmondó（『ABニュース』）というサミズダートを発行していた社会学者デムスキ・ガーボル⁽¹⁹⁾が講演したのを理由に禁止されてしまった。

経済学者たちは1970年代の初めに権力によって厳しく締めつけられたので、純粋に学術的な研究にしか携ってこなかったが、1980年代になって出版物に変化が見られるようになった。彼らの一部は“社会科学化”し、経済の分析のなかに社会学的、政治学的観点がますます加えられ、経済改革は政治改革抜きでは達成不可能なことが暗に指摘されていた。この頃、改革派経済学者たちと民主反対派との繋がりができ、彼らの立場が強化された。1968年の新経済メカニズム導入の立案者であるニエルシュも、広範な大衆が経済改革の真の参加者になっていない原因を、人々が不満を言える場所、利害が率直に表面に表れるような政治制度が実現されていないことに求め、「改革を適度に社会的・政治的変革に結びつける」⁽²⁰⁾必要を訴えた。この時点までに労働者党は、経済改革だけではなく政治改革も不可欠であると主張する勢力を党内に許容するまでに変質していたのである。

(1) *Pártélet*（『党生活』）(Budapest, 1968)

(2) ヘゲドゥーシュ・アンドラーシュ Hegedűs András (1922-) はじめ政治家として活動し、1953年に第一副首相。1955年から1956年10月のハンガリー事件勃発まで首相。ハンガリー事件後は社会学研究にたずさわり、1963年から1968年に解任されるまでハンガリー科学アカデミー社会学研究所所長。1973年に党から除名された。

〔論 説〕

- (3) 拙論「ルカーチのスターリン主義批判」(学習院大学大学院政治学研究科『政治学論集』第2号, 1989年)を参照。
- (4) キシュ・ヤーノシュ Kis János (n. d. -) 1973年に党から除名された。民主反対派として『話している』を編集。自由民主同盟の創設メンバーで、初代党首。
- (5) ベンツェ・ジェルジ Bencze György (n. d. -) 1973年に党から批判された。
- (6) ヘッレル・アグネシュ Heller Ágnes (1929-) 1958年, ルカーチとともに大学から罷免された。1963年からハンガリー科学アカデミー社会学研究所主任研究員。1973年に党から批判された。1978年に当局に出国を勧告され, オーストラリアのラトロープ大学社会学部に移る。
- (7) マールクシュ・ジェルジ Márkus György (1934-) ハンガリー科学アカデミー哲学研究所主任研究員。1968年, 党から除名される。1973年に党から再び批判された。1978年に当局に出国を勧告され, 西ドイツを経てオーストラリアに移住。
- (8) マールクシュ・マリア Márkus Mária (n. d. -) ポーランド出身。1973年に党から批判された。1978年に当局に出国を勧められ, 西ドイツを経てオーストラリアに移住。
- (9) ヴァイダ・ミハイ Vajda Mihály (1935-) 1963年からハンガリー科学アカデミー哲学研究所研究員。1973年に党から除名された。1978年に一時的な出国を勧告され, 西ドイツのブレーメン大学などを経てオーストラリアに移住。現在, デブレツェン大学所属。
- (10) ニェルシュ・レジェー Nyers Rezső (1923-) 印刷工であったが, 1940年に社会民主党员となる。ハンガリー共産党との二党合同後, 1954年から1956年まで勤労者党中央指導部委員。1956年7月から10月まで食品産業相。1957年から労働者党中央委員会委員。1960年から1962年まで財務相。1962年から1974年まで中央委員会書記。1966年から1975年まで政治局員。1974年から1981年までハンガリー科学アカデミー経済学研究所所長。1988年, 国務相。1989年6月, 労働者党党首。1989年10月, ハンガリー社会党党首。
- (11) ドナート・フェレンツ Donáth Ferenc (1913-1987) 第二次世界大戦時に反ナチ闘争の活動家。1945年以来ハンガリー共産党中央委員。ラーコシによって投獄された。ナジ派に属し1956年10月23日に党中央委員会書記。ソ連軍介入後, 投獄され1960年に出獄。以後, 農業問題の著述活

動に専念。

- (12) チョオーリ・シャンドル Csoóri Sándor (1930-) 人民派作家。詩人。
- (13) ラドフノーティ・シャンドル Radnóti Sándor (1946-) 文芸批評家。大学卒業後、3年間 Magvető (種を蒔く人) 出版社で、7年間 Gondolat (思想) 出版社で原稿閲読係であったが、政治的な理由で退職を余儀なくされた。10年間無職であったが、1989年9月からエトヴェシュ・ローランド大学美学科研究員。
- (14) ケネディ・ヤーノシュ Kenedi János (1947-) 1969年から1970年まで種を蒔く人出版社の編集者。1988年から Nyilvánosság Klub (情報公開クラブ) の幹事。
- (15) ショルト・オットーリア Solt Ottília (1944-) 1988年から自由民主同盟の幹事。1990年、国会議員。国会の家族保護および厚生委員会の副委員長。
- (16) シラージ・シャンドル Szilágyi Sándor (n. d. -) 社会活動家。民主反対派としてサミズダートに投稿。1989年3月15日の1848年革命記念日の集会を組織した。
- (17) ボジュガイ・イムレ Pozsgay Imre (1933-) 1957年から1965年までバーチ・キシュクン県党委員会マルクス・レーニン主義夜間大学学長。1971年から1975年まで *Társadalmi Szemle* (『社会評論』) 編集長代理。1976年、文相。1980年以來、党中央委員。1982年から1988年まで愛国人民戦線の第一書記。1988年5月に政治局員となる。
- (18) 『話している』3, (Budapest, 1983)
- (19) デムスキ・ガーボル Demszky Gábor (1952-) 1976年から1981年まで *Világosság* (『明解』) の編集者。1977年から民主反対派の運動や SZETA の活動に参加。1981年、AB 独立出版社を設立するとともに『話している』の編集者となる。1981年から出版禁止となり、1984年に執行猶予付きで6カ月の懲役判決を受ける。1988年から自由民主同盟幹事。1990年よりブダペスト市長。
- (20) Nyers Rezső, "A reformhoz kötöttem sorsomat (自分の運命を改革にかけた)", 『動く世界』1-2 (Budapest, 1984), p. 13.

第2節 複数政党制への移行

ハンガリーの政治改革は、党内改革派のボジュガイのイニシャチブによって愛国人民戦線が公開討論を主催し、1983年に国会で採択された複数立候補制の選挙法によって始まる。それまでは1966年の改革によって複数候補は全体の割にすぎなかったが、「よりアクティブでより民主的な国民の政治参加を実現する」⁽¹⁾狙いがあった。公開討論は全国で行われ、1300もの議事録が残されている⁽²⁾。

しかし公開討論とはいうものの、『話している』によれば「部屋には40-50人が集まっていたが、各人のもとには記名された招待状と要約された法案の謄写版刷りの原稿があり、平均年齢は60歳ぐらいで、後で発言者の自己紹介の時に明らかになったことは、ほとんどの出席者は地区党組織のベテランで警察や役所やいくつかの“社会組織”をも代表していた」⁽³⁾というようなものであった。複数の候補者を立てること自体は、「法的に強制することはできず、多くの社会的オルタナティブを生み出すことによるのみ可能である」⁽⁴⁾という政治学者シュミット・ペーテル⁽⁵⁾のような批判は当然であった。この時点では、『話している』が書いているように「また誰の地位も脅かさない改革を行い、またその成果を気にしなくてもよい公開討論を行った」⁽⁶⁾という性格が強かった。

1985年6月8日には、実際に複数候補者を義務づける国会議員選挙が行われた。この選挙で候補者になるには、候補者擁立集会で出席者の3分の1の支持を受け、愛国人民戦線の推薦が必要であった。民主反対派は、1949年に当時の党第一書記ラーコシらの謀略裁判で殺されたライク・ラーズロー⁽⁷⁾の息子であるライク・ラーズロー⁽⁸⁾、チャウシェスク体制のエルデーイ（トランシルヴァニア）からハンガリーに亡命した哲学者タマーシュ・ガーシュパール・ミクローシュ⁽⁹⁾や、経済学者のパウエルら7人の候

補者を立てようとした。しかし候補者擁立集会場には、すでに労働者党が大量動員をかけていて集会場のなかに入れてもらえず、場所によっては武装した労働者護衛隊や警官隊が動員され、正式な許可を持ったカメラマンの撮影していたフィルムが没収されるといった妨害工作がなされた⁽¹⁰⁾。このため民主反対派からは一人も立候補できなかったが、権力が民主反対派に注意力を集中させていたためか、何人かの無所属の国会議員も誕生し、後の複数政党制への端緒を開いたのも事実である。

この年、ドナートの呼びかけで体制に批判的な潮流を代表する知識人がモノルのキャンピング場集って3日間討議し、人民戦線的な運動が始まった。サライは、この会議で「権力についている身分の新しい知識人の一部（以下、このグループを新改革派知識人と呼ぶ）と民主反対派の間に“半ば組織的な”関係が宣言された」とし、「その新改革派知識人の二つの目立った集団を会議で改革派経済学者のグループと人民作家のグループが形成している」⁽¹¹⁾とした。モノル会議では、諸立場の表明が行われただけで有意義な議論はなく、1985年までの努力を統合するものとして頂点をなすが、諸グループの対立を内包するものであった。これ以降、これまでの労働者党内の保守派と改革派だけでなく、改革派経済学者グループ、人民作家グループ、民主反対派、新旧のテクノクラートなども、合従連衡を繰り返すなかで権力闘争を展開し、「階級性を持った身分」の内部構成は変化していくのである。

1986年には準政治的な団体が結成された。戦前の小農業者党の急進的指導者でドイツ占領軍に抵抗した愛国者にちなんだバイチ・ジリンスキ・エンドレ⁽¹²⁾友好協会が設立され、後の諸新政党の指導者となるような多くの人材が参加した。

1987年になると、1985年の党大会で採択された基本方針は幻想でしか

〔論 説〕

なく、無原則的なカーダールのバランス政策が完全に破綻した状態となった。党指導部内では、対西側債務の累積問題が深刻になり、個人所得税や付加価値税導入といった国民に不人気の増税政策以外、新しい構想を打ち出すこともできず、政治的な真空状態が出現した。

こうした状況のなか、新テクノクラシーを代弁する政治学者ビハリ・ミハイや経済学者レンジェル・ラースロー⁽¹³⁾やバウエルらが、「転換と改革」と題し、現状分析と提案を行った。「党中央委員会は、1987年のうちに国の深刻な経済状態とその社会的帰結を議論しなければならない」⁽¹⁴⁾と政策の転換を訴えた。1980年代の初めに登場する新テクノクラシーと新改革派知識人は同世代で、サライは、「新テクノクラシーのもとで新改革派知識人は“内密の顧問として”要請され、多くのメンバーが党や国家官僚制内の諸決定の作成において参加している」⁽¹⁵⁾と指摘している。

1987年の前半に、この間に死去したドナートの「人民戦線精神」でモノル会議を発展させるべく、独立諸グループの共通の綱領を作成するために会合がもたれていた。しかし民主反対派が綱領的文書「社会契約」を公表したのを契機に、人民作家のグループと民主反対派のグループは分裂した。

9月27日、人民作家グループはボジュガイの出席のもとラキテレクで討議し、ハンガリー民主フォーラム（以下、民主フォーラム）を結成した。労働者党员であるビーロー・ゾルターン⁽¹⁶⁾も結成メンバーとなっていることは注目される。招待者は選別され、民主反対派からはコンラード、1956年の活動家からはヴァーシャルヘイ・ミクローシュ⁽¹⁷⁾とメーチ・イムレ⁽¹⁸⁾だけが招待されていて、ヴァーシャルヘイとメーチはこの差別のために出席を見合わせた⁽¹⁹⁾。主賓であり基調報告者であったボジュガイは、デムスキ、『話している』の主筆陣であるハラスティ・ミクロー

シュ⁽²⁰⁾やケーセグ・フェレンツ⁽²¹⁾、1956年の活動家でロンドンに亡命していたクラッショール・ジェルジ⁽²²⁾、1956年の中央労働者評議会議長であったラーツ・シャンドル⁽²³⁾ら、警察ざたが多かった反対派が出席しない場合のみ参加すると条件づけていたと言われている⁽²⁴⁾。この選別によって民主フォーラムは、反対派の統一や連帯よりも改革派 коммуニストと関係することに戦略を定めたことが明白になった。ポジュガイは、カーダール体制のイデオロギー担当党幹部である「アツェール・ジェルジ⁽²⁵⁾が、夢見て果たせなかった反対派勢力を最終的に修復不可能なほどに分裂させるということに成功した」という見方や、民主フォーラムは「改革派 коммуニストと秘密協定さえも結んだ」⁽²⁶⁾という非難が起こる原因となった。

「転換と改革」、「社会契約」やラキテレクでの討議は、それぞれ重要なモメントであったが、内容的には体制変革は彼らの目的や要求とはなっていなかった。引続き一党制の枠内で考えられていて、現体制の民主化や合理化、党と国家の分離、市場改革の実現といったことが目的であった。この時点では体制変革の可能性があるとは考えられていなかったのである。

民主反対派グループは1988年3月17日、フリー・イニシャチブ・ネットワークを結成し、11月19日に自由民主同盟に改組した。5月1日に発表した「出口はある」と題された声明は、一党制の清算と複数政党制による議会制民主主義への転換、すなわち国家社会主義を乗り越えることを目標に掲げていた。

民主フォーラムと自由民主同盟の対立はますます激化していった。1930年代のハンガリー民族固有の価値を農村と農民に求める人民作家、ネーメト・ラースロー⁽²⁷⁾やイイエーシュ・ジュラ⁽²⁸⁾らの人民派と、西欧的近代化を目指す自由主義的知識人や共産主義者らの都市派との対立に遡ること

〔論 説〕

ができる根の深い問題であった。この対立のため政治参加を志す学生たち青年は、自らの組織を作らざるをえなかった。こうして3月30日に結成されることになった青年民主同盟は、「両方の“祖先”に同じように良い関係を築くことを望む“離婚した親達の子”と自らを定義づけた」⁽²⁹⁾。さらに1989年にかけて、第二次世界大戦後に大政党であった小農業者党が独立小農業者・農業労働者・ブルジョワ党（以下、独立小農業者党）として、同様にハンガリー社会民主党（以下、社会民主党）が復活し、さらに民族農民党を継承するハンガリー人民党（以下、人民党）など、50以上のミニ政党が結成された。

- (1) “Az MSZMP 1983. július 6. -i határozata.” (労働者党の1983年7月6日の決定), *Népszabadság* (『人民の自由』), 1983. 7. 9.
- (2) Kukorelli István, *Így választottunk. . .* (『このように選挙をした. . .』) (Budapest, 1988) p. 98.
- (3) Fűrge Jonathan, “Egy választó feljegyzései...” (ある選挙人のメモ. . .), 『話している』9 (Budapest, 1984) p. 100.
- (4) “A demokráciára - kötelezni? (Interjú Schmidt Péter egyetemi tanárral).” (『民主主義に - 強制する? [シュミット・ペーテル大学教授のインタビュー]』), *Magyar Nemzet* (『ハンガリー民族』), 1983. 9. 29.
- (5) シュミット・ペーテル Schmidt Péter (n. d. -) エトヴェシュ・ローランド大学教授。
- (6) “Az új választási törvényről - utólag.” (『新選挙法について - 最後に』), 『話している』9 (Budapest, 1984) p. 11.
- (7) ライク・ラースロー Rajk László (1908-1949) 国際旅団ハンガリー大隊付党書記としてスペイン戦争に参加。フランスで拘禁される。逃走して帰国するが再び逮捕されドイツに連行された。第二次世界大戦後、帰国し、ハンガリー共産党中央委政治局員。1946年から内相。1948年からは外相も兼ねる。1949年に、でっち上げ裁判で「チトー主義者」として死刑に処せられた。
- (8) ライク・ラースロー Rajk László (n. d. -) 建築家。ブダペシュト

- でサミズダートを販売する「ライク・ブティック」を始め、何度も家宅捜索を受けた。自由民主同盟の創設メンバー。1990年、国会議員。
- (9) タマーシュ・ガーシュパール・ミクローシュ Tamás Gáspár Miklós (1948-) 現ルーマニアのコロジュヴァール（クルージ・ナボカ）生まれ。ハンガリー文学週刊誌の編集者であったが、出版禁止処分を受け、1978年にハンガリーに移住を余儀なくされた。エトヴェシュ・ローランド大学文学部研究員となるが、1982年に政治的な理由で解雇された。民主反対派としてサミズダートに寄稿。自由民主同盟の創設メンバー。1989年よりエトヴェシュ・ローランド大学講師。1990年、国会議員。
- (10) Mécs Imre, “A Szabad Demokraták Szövetségének rövid története (1988 végéig).” (「自由民主同盟小史 [1988年末まで]」) in :『ハンガリー政治年鑑 1988年』 p. 294.
- (11) Szalai, *op. cit.* p. 10.
- (12) バイチ・ジリンスキ・エンドレ Bajcsy-Zsilinszky Endre (1886-1944) 1920年代に極右の「人種防衛党」指導者の一人。1930年代に次第に左派に転じる。1939年に小農業者党に参加。ドイツの脅威を防ぐため共産主義者との統一行動を支持した。1944年、ドイツのハンガリー占領後に検挙され、釈放後、対独軍事闘争の指導を開始したが、検挙され死刑となった。
- (13) レンジェル・ラースロー Lengyel László (1950-) 財政研究所およびその株式会社化された財政研究株式会社の研究員。1988年4月に労働者党から除名された。
- (14) “Fordulat és reform” (「転換と改革」), *Medvetánc* (『熊踊り』) 2. (Budapest, 1987) p. 43.
- (15) Szalai, *op. cit.* p. 11.
- (16) ビーロー・ゾルターン Bíró Zoltán (1942-) 民主フォーラムの創設メンバー。1988年4月に労働者党から除名された。セグド教育大学歴史学教授。
- (17) ヴァーシャールヘイ・ミクローシュ Vászárhelyi Miklós (n. d. -) 自由民主同盟の創設メンバー。
- (18) メーチ・イムレ Mécs Imre (1933-) 1956年、兵士として国境を警備していたが、ソ連軍による介入後、亡命希望者を西側に逃がし投獄された。1988年から自由民主同盟の幹事。1990年、国会議員。
- (19) Mécs, *op. cit.* p. 296.

〔論 説〕

- (20) ハラスティ・ミクローシュ Haraszi Miklós (n. d. -) 『労働者国家における労働者』を書き、1973年に逮捕された。民主反対派として『話している』を編集。自由民主同盟の創設メンバー。1990年、国会議員。
- (21) ケーセグ・フェレンツ Kószeg Ferenc (1939-) 小説出版社やヨーロッパ出版社で編集者であったが、1980年に解雇される。1981年から『話している』の編集に参加。現在もサミズダートではなくなった『話している』の編集者。1988年から自由民主同盟の幹事。1990年、国会議員。
- (22) クラッシュョー・ジェルジ Krassó György (1932-1990) 第二次世界大戦後、ハンガリー共産党に入党。1955年、経済大学で退学処分を受ける。1956年10月23日から武力闘争に参加。25日に逮捕されたが、革命の勝利で解放された。第二次のソ連軍介入のあった11月4日以降、ビラヤ非合法紙を発行し、15日に逮捕。10年の懲役刑で1963年に入獄。労働者や事務員となるが1970年に解雇された。1981年からハンガリーで初めて、1956年の革命記念日に公然と集会を組織。1984年に再び起訴され警察の監視下に置かれた。ロンドンで生活していた兄が交通事故にあったため出国し、1986年にそのままイギリスで政治難民となった。BBCや自由ヨーロッパ放送で働き、「ハンガリーの10月の伝承サービス」という番組で、3年間2カ国語で本国の政治動向についてニュースを放送した。1989年7月に帰国し、ハンガリー10月党を結成した。
- (23) ラーツ・シャンドル Rácz Sándor (1933-) 農業プロレタリアートの家族に生まれた。1956年10月29日、ペロイアニス通信機工場の労働者評議会のメンバーに選出された。11月16日、200以上の労働者評議会の代表によって中央労働者評議会議長に選出された。12月11日に逮捕され、無期懲役刑に服し、1963年に入獄。
- (24) Fényi Tibor, “Ez már a harmadik út” (『これはもう第三の道だ』), *Hiány* (『欠乏』) 2. (Budapest, 1990) p. 20.
- (25) アツェール・ジェルジ Aczél György (1917-) 1935年からハンガリー共産党員。1958年から1967年まで文部政務次官。1967年に党中央委員会書記。1974年に副首相。
- (26) Fényi, *op.cit.* pp.20-21.
- (27) ネーメト・ラースロー Németh László (1901-1975) 1930年代以降、人民派作家の理論的指導者。ハンガリーの歩むべき道は、西欧の資本主義でもポリシェビキの社会主義でもなく、ファシズムの独裁でもポリシェビキの独裁でもないという「第三の道」を唱えた。

(28) イイェーシュ・ジュラ Illyés Gyula (1902-) 1930年代半ばから人民
派作家グループの指導者の一人。1946年から1948年まで国会議員。

(29) Fényi, *op. cit.* p. 21.

第3節 国家と党の分離

1987年以来、もっとも大きな躍進を遂げたのは、しかしながら新テクノクラートであった。若い世代の新テクノクラートは、その大部分が労働者党内で育ったが、改革には党機構が障害になっていると考えていた。彼らは急テンポに党や国家、さらには重要性が増した銀行の上層部の重要ポジションを押さえていった。

党国家のカードル官僚制に関する研究は、これまで散在的なデータをもとにしたものが多かった。党国家から民主国家への過渡期にある現在、分析に必要なデータは徐々に入手することができるようになった。社会学者のガジョー・フェレンツ⁽¹⁾は、権力の主要な保持者である党、国家、大衆組織、企業の上層部の約6000人のデータベースをもとに、カードル官僚制と知識人の関係について1990年に論文にまとめている⁽²⁾。

社会学的諸特徴の分布

| | 党カードル | | 国家上層部管理職 | |
|----------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|
| | 1981年 5,845人 | 1989年 4,989人 | 1981年 748人 | 1989年 431人 |
| 大学、短期大学卒 | 44.2% | 57.1% | 77.5% | 92.8% |
| 医師、法律家 | 5.4% | 7.8% | 19.1% | 26.5% |
| 学位保持者 | 2.7% | 4.7% | 14.6% | 18.9% |
| 外国語知識 | 15.4% | 19.2% | 53.7% | 69.4% |
| 複数の外国語知識 | 4.7% | 7.1% | 28.5% | 43.6% |
| 長期間の専門活動 | 22.3% | 27.8% | 39.4% | 55.5% |
| 専門資格保持者 | 17.6% | 28.5% | 49.6% | 71.4% |

(ガジョー・フェレンツ、「カードル官僚制と知識人」p.10.)

〔論 説〕

表から明らかになるのは、国家上層部管理職の能力や資格が、党カードルのそれをはるかに上回っていることである。エリートグループは、まず国家の指導的なポストを目指し活動しようとしたのである。大臣代理、政務次官、省庁の高官、企業幹部など約 600 人のグループが、社会学的に際だった存在になっている。ガジョーによれば、「このグループが、ノームクラトゥーラのヒエラルキーにおいて中央委員会カードルの影響力のもとにあった」⁽³⁾のである。

専門的な資格をもった優れた人材が国家の上層部に集まることによって、行政の官僚組織は、これまでの無能な国家党カードルに行政が従属させられるということに負担を感じるようになり、国家党から解放され自立した機関になるよう試行していた。これは 1989 年に、政府が党の指導から分離され実現した。

この傾向は、1980 年代の中ごろから国家機関の上層部で展開された大規模な新テクノクラートへのカードルの交代から始まっていた。ガジョーによると「資格をもったエリートの半数以上 (53%) が最近の 4 年間に、さらに 22% が 1980 年と 1984 年の間に、行政の指導的なグループになだれこんだ」⁽⁴⁾のである。新テクノクラートは、沈みかけた船を占拠したともいえよう。国家権力を救うというよりも弱まった党国家や危機の深刻化を前にして、上からコントロールした“体制変革”を実施しようとしているのである。ビハリがいうような国家党と官僚制国家権力の同時崩壊や、盛田氏が指摘したような一党支配の空洞化よりも、国家権力の上層部で質の変化が起こったと言えるのではないだろうか。

労働者党内でも改革派が台頭し、1988 年 5 月 20 日の党全国集会でカードール書記長 (1985 年以前は、第一書記という名称) が失脚し、新保守派のグロース・カーロイ⁽⁵⁾が書記長兼首相となった。ポジュガイとニエル

シュは政治局入りし、中央委員の3分の1が入れ代った⁽⁶⁾。新旧のテクノクラートの間では妥協が成立していた。しかしこの妥協も過渡的なもので、政治体制や所有権をめぐる闘争が激化し、新テクノクラートは政治や経済におけるキーポジションを征服していった。11月には悪化した経済の責任をとる形で、グロースは首相を新テクノクラートで経済のエキスパートであるネーメト・ミクローシュ⁽⁷⁾に譲らざるをえなかったのである。ネーメトの民営化政策や開放政策⁽⁸⁾は、自由民主同盟のエコノミストたちの主張と基本的に同じであり、労働者党の質の変化もほとんど行き着く所まで行き着いたのである。

- (1) ガジヨー・フェレンツ Gáspár Ferenc (n. d. -) ブダペシュト経済大学教授。
- (2) Gáspár Ferenc, "A kádérbürokrácia és az értelmiség" (「カール官僚制と知識人」), 『社会評論』11. (Budapest, 1990)
- (3) Gáspár, *ibid.* p.10.
- (4) Gáspár, *ibid.* p. 11.
- (5) グロース・カーロイ Grósz Károly (1930 -) 1945年, ハンガリー共産党に入党。1979年, ボルショド・アバウーイ・ゼムブレーン県の党第一書記。1980年, 党中央委員。1985年, 党政治局員。1987年6月から首相。1988年5月から党書記長。同年11月に首相を解任された。
- (6) 『ハンガリー民族』1988. 5. 23.
- (7) ネーメト・ミクローシュ Németh Miklós (1948 -) 1968年, 労働者党に入党。最初の職はカール・マルクス経済大学助手。1977年から1981年まで全国計画局部長代理。1987年, 党中央委員, 党中央委員会書記, 党中央委員会経済政策委員会委員長。1988年5月, 政治局員。1988年11月から1990年4月まで首相。
- (8) 『ハンガリー民族』1989. 1. 31.

結 び

国家党としてスタートした労働者党は、ソ連に忠実な対外政策をとる一方、国内では自由化を進めるというカーダール主義によって徐々に変質した。“グヤーシュ・ Kommunismus”によって、将来のキャリアのためというプラグマティズムで様々な人材が党员となり、国家党から“寄せ集めの党”に変化していった。ニエルシュのように、1948年のハンガリー共産党と社会民主党の合同以前に社会民主党員で、合同後も社会民主主義者であり続けた人も多いのである。ルカーチやその弟子たちによる批判、ニエルシュらによる経済改革、ポジュガイらの複数政党制への老練な布石、新テクノクラートや新改革派知識人らの台頭で、労働者党の変質が進み、1956年のような国家権力の崩壊にはつなげていない。

新しい支配エリートによる“体制変革”は、上からコントロールされたものである。新たに登場した諸政党は、ほとんど新支配エリートによる政党で、真の大衆政党に脱皮できなければ、新支配エリートと大衆という両者の溝が深まり、民主化という歴史的課題の達成が困難となる限界もはらんでいる。

(ライオグランデ大学日本校講師)